

震災の時・語れなかった言葉・ようやく出てきた行為

奨励	中井 大介【なかい・だいすけ】
奨励者紹介	日本キリスト教団千里聖愛教会牧師 千里聖愛保育センター理事長 神戸女学院大学非常勤講師

被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています。被造物だけでなく、`霊、の初穂をいただいているわたしたちも、神の子とされること、つまり、体の贖われることを、心の中でうめきながら待ち望んでいます。わたしたちは、このような希望によって救われているのです。見えるものに対する希望は希望ではありません。現に見ているものをだれがなお望むでしょうか。わたしたちは、目に見えないものを望んでいるなら、忍耐して待ち望むのです。

同様に、`霊、も弱いわたしたちを助けてくださいます。わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、`霊、自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださるからです。人の心を見抜く方は、`霊、の思いが何であるかを知っておられます。`霊、は、神の御心に従って、聖なる者たちのために執り成してくださるからです。

(ローマの信徒への手紙 8章22―27節)

東日本大震災発生

2011年3月11日は金曜日でした。地震の発生したとき、私は教会員数名を自動車で乗せての運転中でした。神戸の老人ホームで療養している方の訪問の途上にありました。そして、訪問先で皆さんと一緒に地震と津波の被害状況を知らせるテレビ中継を見て、ものすごいことになった、と息を飲みました。当時はSNSのTwitterが大流行していました。地震が発生した直後から、Twitterのタイムラインはものすごい早さで種々雑多な情報が流れ始めました。その夜は、被害の全容が分からないぐらいに広くて、大きな被災地が発生していることと、非常に曖昧で確認のしようのない、しかし、想像を絶する状況を知らせる情報が入り続けていました。次々に飛び込んでくる情報の重さに対して言葉が出てきません。何をしたいのかも分からないのです。右往左往するのもイヤだから、日本基督教団の有志が立ち上げているネット掲示板の書き込みを見ながら支援物資の荷造りを始めていました。とにかく阪神淡路大震災のときの経験から、体だけは動くのです。けれども、言葉が出ない。何も語れないのです。情報の洪水に洗われ尽くした金曜日を越えて、土曜日の未明から朝にかけて、津波の被害が現れてきました。その朝、私は夜が明けてすぐに教会のお墓に出かけました。何かがあるわけではありません。ただ、どこかへ行きたかったのです。そして、心を整えて、明日の日曜日、教会に集まってくる方たちを前にして何を語れるだろうかと思い巡らしていました。

うめき

私たちの教会は、平均年齢が75歳を超えるかもしれないぐらいに高齢の方々が多く出席しています。地震発生の二日目、テレビなどの情報を通して、一体どんな心持ちであろうかと考えたときに、本当に胸が痛みました。私は牧師として、教会員が悲しいときに悲しさに寄り添いたいし、少しでも慰められるような励ましを伝えたい。しかし、私自身、出来事を前にして大きなショックを受けているのです。私だって「神様、この出来事を前にして私たちはどうすればいいのですか」と叫びたいぐらいだったのです。それでも「ぐうっ」と歯を食いしばってうめくような声しか絞り出せませんでした。これが、うめきか、どうめくことしかできない自分が少し滑稽に思えて、そのときに初めて自分の様子のおかしさに笑うことができました。ひょっとすると、現実を直視する私たちから出てくる最終のものが、言葉にならない「うめき」なのかもしれません。東日本大震災から2年3カ月経ち、聖書のなかから、うめきについて書かれたところが読めるようになってきました。ローマの信徒への手紙のなかで、人間のどん底、うめきの状態のなかで「神の霊」が一緒にうめく、という言葉に慰められています。

この手紙を書いたパウロは、人間の心の底から発する「うめき」に対して無関心ではありませんでした。この世の中で、人間はうめく、ということを受け止めようとしたのです。そして、うめく人間のかたわらには、神がいてくださるということを信じていました。パウロの信じた神は、人間の悲惨な状況、貧しさや弱さ、破れたところ、血を流している傷を見て憐れんでくださる方でした。そして、神の御子イエス・キリストがもっとも苦しく、痛みをもったうめきを共有してくださった、と信じたのです。

この聖書の言葉を読むとき、私は慰められる思いがします。私がうめくとき、神もうめいてくださっている。神は、私たちを決して一人にはしない神である。パウロが信じた神は、そのような神だということです。

日常が、非日常になることがある。そのことを思い知ったのは、18年前の阪神淡路大震災のときでした。そして、そこから始まった被災後の世界で考えたことは、今生きている命は「預けられているものだ」ということでした。地震で生き残った人と死んだ人を分けたのは、私たちのもち合わせている常識なんかではありませんでした。いい人であることも、悪い人であることも、何も基準にはなりません。そして、生き残った人は、どうして自分が生き残ってしまったのか、どうしてあの人が生き残らなかったのか、という苦しい問いかけを続ける日々が始まったのです。神戸の街が復興しても、そこに取り残される人たちがいました。声も出せずに、うめき続けている人は、何年経てもいるのです。神戸での震災支援は、そのような出会いが基になって続けられていました。そして、東日本大震災でも、あのときから、うめき続ける人が痛みを和らげることなく日々を重ねているのです。

試練の意味を探す旅

ヨハネによる福音書14章1-3節には「『心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。わたしの父の家には住む所がたくさんある。(中略)行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしの家にもとに迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる。』」というイエスの言葉が記されています。イエスが死の直前まで、弟子たちに信仰に生きさせることを勧めた言葉です。危機的状況において、神を信じること、そして、私たちはイエスによって導かれていることを信じることで、試みの内実を冷静に見つめていけるのかもしれません。

震災を経験してから初めての日曜日、その日の朝も、うめきのなかで、そのときに向き合っている現実に飲み込まれないように、教会のお墓の前で立ち、心を整える時間を少しだけ作りました。そして、礼拝に備えていったのです。

人はどうして試練に遭うのだろうか。苦しみと向き合うときに、何者として生きれば良いのだろうか。

荒野の誘惑

聖書には「荒野の誘惑」といわれるエピソードがあります。イエスが洗礼を受けた後、神に従う道に生きている途上で、試練に遭うというエピソードです。信仰をもっているのに、苦しみと心を揺さぶる誘惑に直面するという出来事です。

そのとき、イエスを試みたのは悪魔だと書いています。悪魔が、イエスは神に従う者であるかどうかを試すのです。もっと言えば、イエスが神に従う者であることを証明せよ、実証してそのように生きろ、ということ突きつけるのです。これは、悪魔とイエスの戦いが、信仰者が現実にも挑む戦いに重ねられています。「この世に神は本当に生きているのか」と問い続ける戦いです。

神の子イエスが試みに遭う。イエスもまた、試みを受けて立つ。イエスが示したのは、神がこの世に滅びる者が一人もいないように涙を流している、というメッセージでした。信仰というのは、戦いであり、暗いところで生きることなのです。向かい風であり、見えにくいものです。だからこそ、神の救いは風に向き合う人にとって前から迫ってくるものとして現され、暗いからこそ光として輝いて示されるのです。この世から、神は隠されていても、神は働き続けているということを信じるのが、イエスの信仰の戦いであつたのです。そして、震災のとき、私たちもまた、自分の信仰と戦うときでした。

スマイル

『スラムダンク』、『リアル』、といった漫画を描いている井上（いのうえ）雄彦（たけひこ）という漫画家があります。宮本武蔵を題材にした『バガボンド』が、代表作になるかもしれませんが。その井上さんが、地震の直後から、墨絵で人の顔を描いて発表し続けています。こんなときだからこそ、笑顔で生きよう、という願いを込めて描き続けているのです。こんなときに絵を描いている暇なんてないと言うよりも、むしろ、ひたすらに、こんなときだからこそ、絵を描くのだという姿勢で向き合っている姿に、私は祈りがある、と思いました。

【#prayforjapan】井上雄彦さんの描くスマイル【全まとめ】
URL:<http://matome.naver.jp/odai/2129990913746654601>

Pray for Japan

そして、地震の直後からTwitterにprayforjapanという「つながり」ができて、そこに世界中の人びとからの声が集まってきています。日本のみんなのために祈りを合わせよう、という呼びかけに、世界中が一つのメッセージを共有していたのです。写真や自分の作品、あるいは祈りの集会の様子などを、それぞれの表現でメッセージとして表しているのです。2011年2月に深刻な地震が発生したニュージーランドのクライストチャーチからも、今までは日本の人たちが自分たちを助けてくれていたのだから、今は僕たちが支援する番だというメッセージを送る人もいます。小さな子どもたちが祈りを合わせている場面もあります。国連でも「日本は今まで世界中に援助をしてきた援助大国だ。今回は国連が全力で日本を援助する」という公式の声明が発表されています。

【prayforjapan】世界から届いた日本への祈り

URL:<http://matome.naver.jp/odai/2129985372846288901>

寄り添って生きる

現場にいなくても、被災者ではなくても、どうしたらいいか戸惑うときにでも、私たちにはできることがあります。誰かとつながって、祈りを合わせていくこと、記憶し続けていくこと、そして、来るべき復興のときを見据えて、崩れ落ちた足下のレンガを一つ持ち上げて、積み上げていくこと。現地に必要なものは、すぐに見えてくる。そのときにすぐに支援できるように献金を集め、これから始まる10年20年にわたる復興への息の長い支援活動に備えていく必要がある。人が分断されないための執り成しの働きは今も大切です。そして、次の世代の人びとに、私たちの世代は未曾有の災害に出会いながらも、人としての温かさを共有していくことこそ一番の価値と定めて生きて働いた、と語り伝えるために、今の軸足を確認していきたいと思うのです。

「私たちは一人ではありません」という合い言葉に、希望をもちながら生きるとき、そこに神の国が実現していることを、私は信じています。

2013年6月12日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録